



# ポイント

作家は、文学作品に自分の意見を盛り込みます。だから、もとはおとぎ話でも、実篤が書くと、「かちかち山」の登場人物は実篤の言葉で話し始めます。

例えば、兎と狸の会話では、人を信じて正直に生きることのすがすがしさを語っています。

(※狸はお婆さんをだまして殺したことを、ウソをつけて言い逃れをする。兎は狸を懲らしめるために、話を信じるふりをして、油断させる。)

狸。 あのお婆はお前さんさへ食ひたがつてゐたよ。——(中略)——

兎。 そうかね。そんなにおそろしい婆さんだったかね。それならつまり、君は僕の命の恩人だと云つてもいいのだね。——(中略)——

狸。 何しろ人は見かけによらないとはよく云つたものだよ。俺なんか、誰の云ふことも信用しない。油断はしない。だからだまされることはない。

兎。 さうかね。僕はすっかりだまされてゐたよ。

狸。 それは君は正直ものだからさ。

兎。 そのかはり僕は夜はよくねむれるし、かうやつてゐても気がおちついてゐられるよ。君は夜もろくにねむれないだらう。

狸。 それはさうさ。

友達と、それぞれの役になつたつもりで、声を出して読んでみよう！

あの婆はお前さんさえ……



そうかね。そんな……



今度は、役を交代して読んでみよう。  
読む人がかわると、せりふの感じががうよ。

# もっと知りたい

## 武者小路実篤

### 実篤の戯曲 1 かちかち山

武者小路実篤は、何かを考へるとき、まず場面と会話で考へたそうである。そんな実篤にとって、自分が書きたいことを一番書きやすい方法が「戯曲」でした。

ところで、「戯曲」って、何でしょう？

実篤が昔話を基に書いた戯曲「かちかち山」を見てみましょう。

「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。」……

昔話の「かちかち山」は、こんな風にはじまります。

でも、実篤が書いた「かちかち山」は、書き方がちよつとちがいます。

（婆さんは爺さんの帰つて来るのを働  
きながら待つてゐる。其処に近処の兎  
がたづねてくる。）

兎。 お婆さん、お婆さん。

婆。 誰かと思つたら、兎さんか、よ  
く来てくれた。暫らく顔を見せ

なかつたね。

兎。 一寸病氣をしてゐましたので。

婆。 それはいけないね、お爺さんも

お前さんのことを時々心配して  
ゐなかつたよ。



### 知ってる？

登場人物の話し言葉を「台詞」といいます

場面の説明を「ト書き」、

このように、場面の説明と登場人物の話し言葉で書かれた文学作品を「戯曲」といいます。

まるで劇の台本のようにですね。

